《論文》

1930年代後半，日本人農業研究者と中国華北の「乾地農法」との接触，その評価と吸収――三本木原営農支場の設立までを中心に――

（済南大学）三村　達也

［要旨］

本稿では1930年代後半，在中国華北地域の日本人農業研究者らが現地の農業を直接目にした経験から，それに対する評価を高めていった結果，彼らが得た華北農業に対する知見が，1945年６月という終戦間際の時期に日本へ移植され，新たな農事試験場の支場創設に至った経緯に着目した。加えて当時，その構想実現に関与した人的ネットワーク，当時の日本側の農政事情にも言及することで，その実態を立体的に描き出した。これにより，1930年代後半－1945年前後の時期，農業分野において中国から日本へ与えた影響が及んだ流れ，かつ，その具体的実態が明らかとなった。

Ⅰ．はじめに

第二次世界大戦時期の日本人の中国体験は戦後の日本に何をもたらしたのか。これが本研究を貫く大きな問題意識である。しかし，この点については従来，必ずしも十分な考察が行なわれてこなかったように思われる。この背景には戦時中，中国へ渡り，戦後自身の中国体験を公の場で語る人々が多くはいなかったこと，また，そのような記録類が豊富には残されなかったことも関与しているであろう。

上記の問題意識を具体的事例に即して考察すべく，本稿では1930年代後半，日本占領下の中国華北へ派遣され，農業研究・指導にあたった日本人農業研究者らが，直接目にした華北農業に対して評価を高めていった結果，そこで得た農業知見が終戦直前の日本に移入されていった実態に着目した。

本稿に関わる先行研究は以下のようである。まず日本側の研究成果に，天皇制のシンボルとして国家の統一性を基礎づけたコメの新品種が，植民地統治にいかに貢献したのかを論じた藤原（2012）の成果がある。また，日本の稲作をめぐる開発の進行と優良品種がいかに中国華北や東北部に普及したのかを，当時の日本側の農政事情や社会経済条件などに目配りしながら考察を進めた李の一連の成果（2014，2015ほか）も見られる。さらに，占領下の華北において農業研究調査を進めた華北産業科学研究所・華北農事試験場の研究調査の実態を詳細に明らかにした山本（2015）の成果も出された。その一方で中国側の研究成果には，日本占領期，華北に日本側が設置した農場における植民経営の実態について実証的に明らかにした張（2004）や，華北で日本側の農業研究調査を担った華北産業科学研究所の設立とその活動実態を明らかにした丁（2012）の成果がある。さらに，中国の農業科学技術の発展において，日本占領期の影響が後の農業研究組織・体制，人材養成などに一定程度寄与したとする認識を示した朱（2013）の成果もみられる[1]。

上記，日中双方の研究成果には一つの共通性がみられる。それは同時代の日本が，中国への侵略を進める過程で，中国でいかなる農業調査・研究を行ったのか，それらが中国に対して農業研究と

技術・農業経営・統治などの面でどのような影響を与えたのか，ここに関心を集中させてきたという点である。換言すれば，同時期の中国から日本への農業分野の影響という研究視角・視座はほぼ見られなかった。

そうした中，田島（2006）は1930年代後半から，中国華北で日本人が実施した農業研究の調査活動の実態（主に中国古農書研究，中国農法との比較論研究），並びに，その戦後への影響と経緯を詳細に明らかにした。また，続けて出された氏の成果（2007）は，華北の日本人農業研究者らが得た中国農業の知見が，戦後日本の中で「総合的な試験研究」という形で青森の三本木原営農支場で実施された史実，その後，「総合的な試験研究」が東北農業試験場，さらに農林省「経営土地利用部」へと連続していった系譜を指摘している。ただ，田島の成果（2007）は計２頁という限られたものであり，田島自らもこれを「問題提起」とする。ちなみに，この三本木原営農支場の創設経緯・農業経営の実践については兼ねてから西尾（1997）も関心を寄せてきた。事実，同支場の創設経緯や，そこでの先進的取り組みは，西尾の一連の成果（2005，2006a，2014）において既に一定程度明らかにされている。ただ一方で，同時代の日本人農業研究者らが華北農業から得た知見を日本農業にいかに活かそうとしたのか，それら構想がどのように三本木原営農支場の創設に寄与したのか，或いは，本構想に関わる日本人農業研究者，並びに政府関係者の人的ネットワークにどのようなものがあったのかという点に対しては十分な考察が及んでいない。要するに，戦時期，中国華北の農業知見をいかに，どのような意図で，誰が移入したのか，その全容は未だ明らかになってはいないのである。

上記の課題に応えるべく，本稿では1930年代後半，日本人農業研究者らが華北農業，特に「乾地農法」を自らの眼で見た際の驚きと，それに伴う華北農業への認識変化の様相，さらに，華北農業に対する見識の深化が着想の原点となった三本木原営農支場が，終戦間近の1945年６月，いかに創設へと至ったのかを考察する。その際，当時，支場創設に関わった農業研究者，農政関係者らの人的ネットワークを整理することで，支場の創設過程をより立体的に描き出したい。

Ⅱ．華北における日本側の農業の調査研究，当時の対中国農業への認識

1930年代後半以降，在華北の日本側の農業研究・教育活動を担った主な組織は，北京大学農学院と附設農村経済研究所，並びに華北産業科学研究所と華北農事試験場である。そこでの活動は，1937年７月以降の日本の占領下において，日本の進出・占領に関わる調査活動・宣撫・特務工作の一環を担うものであった。また，華北の研究・教育活動を東京帝国大学や農林省による助力によって行うことで，長期的な研究・教育，技術普及にかかわるインフラ整備を進めるという目的も持ち併せていた(2)。

なお，これら組織の活動実態は，既に田島や山本によって詳細が明らかにされている。そのため，本章ではそれら成果を簡潔に整理した後，当時，華北で農業研究・教育を行っていた日本人研究者らの対中国農業への認識・評価について論じる。

1．北京大学農学院・農村経済研究所の人材

まず，北京大学農学院の設立経緯を整理する。占領下の北京では，旧国立の北平，北京，清華，交通の４大学を整理統合する形で，「臨時政府」の下での「国立大学」，北京大学が開学した。1938年５月から９月にかけて発足した学部（中国では「学院」）が本稿で扱う農学院と，医・理・工の各学院であり，農学院院長には龐敦敏（東京帝国大学〔以下，東大〕卒，畜産学者），名誉教授には那須皓（東大教授兼任）が就任した(3)。

当時の日本人教官の陣容（1939年時点）は，名誉教授の那須皓（東大農卒, 東大教授）を筆頭に，専任・併任教授の鞍田純（東大農卒, 東大助教授），西山武一（東大農卒，農村更正協会嘱託），西村甲一（東大農卒），錦織英夫（東大農卒，東大助教授），野間海浩（東大農卒, 東大助教授。農業法），坂田英一（のちに農林省特産課長。戦後は衆議院議員，農林大臣），秋元真次郎（農林省より出向。のちに華北産業科学研究所長を兼任。作物学），高須虎六（宇都宮高等農林学校教員, 産業組合論），佐々木清綱（九大教授，畜産学）であった。続いて，副教授の斎藤武（東大農卒，農村更正協会嘱託），助教授の大橋育英（東大農卒，同助手），山縣千樹（東大農 3 年退学，満州国産業部），助手の渡辺兵力（東大農卒，農林省）がいた[4]。ここから，北京大学農学院の日本人教官の大多数が，東大農学部の人脈であったことは明らかである。

農学院に続き，1938年10月，研究施設として農村経済研究所が農学院に付設（42年以降，北京大学付属）された。スタッフ（1944年時点）は，錦織英夫をトップとして，西山武一，斎藤武，熊代幸雄，山縣千樹，金森孝一郎，渡辺兵力，中村孝□となっており[5]，北京大学農学院の教官の多くが研究所の研究員を兼任した。農村経済研究所も，中村を除く全てのスタッフが東大農学部卒（或いは，中途退学）である点からみれば，「東大農経教室の出先」という評価[6]はともかく，東大農経出身者が中心に配置されていたことは間違いない。なお，本研究所における調査研究についてはⅢ章で扱う。

2. 華北産業科学研究所の人員・調査研究の実態

華北産業科学研究所は1936年，外務省対支文化事業の一環として青島市に設置された。すなわち，同研究所は「対日感情融和」[7]政策の一環として出発した。1937年 4 月以降，東亜同文会が設立した天津農事試験場も華北産業科学研究所に一本化されたが，日中戦争開始と共に，同年 9 月には一度日本へ引揚げている。その後, 1938年 4 月に「臨時政府」のもとで北京に華北産業科学研究所を移設し，同時に中央農事試験場（1940年 6 月，華北政務委員会の発足と共に，同農事試験場は華北農事試験場に改称）を設けた[8]。なお1938年12月，対支文化事業が外務省から興亜院へと移管されたことで，華北産業科学研究所も興亜院の管轄下に入り，さらに興亜院が廃止された後，1942年11月以降は大東亜省の管轄下へと移った[9]。その後，華北産業科学研究所は1945年 9 月末日に解散，華北農事試験場は同年11月に国民政府農林部に接収されている[10]。

華北産業科学研究所と華北農事試験場は実質的に一体として運営されたが，表向きには前者は日本政府の事業，後者は中国側組織の事業の体裁をとり，日本側の人件費は日本側，その他の事業費および中国人スタッフの人件費は中国側が負担した[11]。初代所長は元兵庫県農事試験場の場長だった江角金五郎（1936.11－1940.6），第 2 代所長は北京大学農学院の教授だった秋元真次郎[12]（1940.6－1944.7），第 3 代所長は農政局畜産課長だった田口教一（1944.10－1945.8）と，いずれも東大農学部出身者が就任している。これら人事に対しては，日本の農事試験場の場長で本研究所の名誉所長であった安藤広太郎が深く関与していたとする指摘[13]もある。

華北産業科学研究所の本場では，農林畜産に関する調査研究を手がけるとともに，農業技術訓練部を設置して農業の技術指導，その普及にあたる人員育成を行った[14]。また，山東省済南（1938年 5 月），青島（1938年 5 月），河北省の軍糧城（1940年 7 月）と石家荘（1939年 4 月。1940年 6 月以降，石門に改称），河南省の開封（1943年10月），山西省の太原（1944年12月）に支場を，河北省の昌黎（1938年 5 月）に分場を，さらに華北各地に原種・原原種場を開設した[15]。それら支場・分場にて農

林畜産に関する本格的な試験研究・普及体制が整備された。ちなみに，北京大学農学院と華北産業科学研究所の関係は密で，情報交換もよく行われていたようである。例えば，両者を中心に1940年夏には華北農学会が組織され，会長に農学院院長の龐敦敏，副会長に研究所長兼場長の秋元真次郎が就任している[16]。

3. 在華北の日本人農業研究者の対中国農業への認識

では当時，華北で農業研究・教育に当たっていた日本人研究者たちは，当時の中国農業に対していかなる認識を持っていたのか。さらに，研究者ごとの認識の違いはどのようなものだったのか。それらの実態を明らかにするため，当時，これら組織の研究・教育指導にあたった人物の回顧録や報告書などを用いて考察を進める。

まず，華北産業科学研究所と華北農事試験場のトップであった秋元真次郎の回想から，当時の対中国農業への姿勢が読み取れる。

> 「産研を青島に置いたときのことはよく知らないが，北京に産研を置いた趣旨そのものは，日本の技術そのままを導入することであってはいかんというのが，僕の基本的な考え方であったわけです。華北には華北の農業技術を確立しなければならないという点を，方針として堅持してきたつもりです。日本の技術者なんかが後進国へ行くときに，日本の技術を後進国へ，そのまま知らせるんだといいますが，そんなばかなことはない（中略）。華北の風土というものが大きく支配するのであって（中略），それに合ったものにモディファイしてやらなければならない」[17]

ここには，「華北には華北の農業技術の確立」をすべきとの認識や，「日本の技術を後進国へ，そのまま知らせる」ことへの批判的認識が示され，華北農業の実態に即した農業技術を打ち立てようとする秋元の姿勢が読み取れる。

続けて，北京大学農学院で教授，その附設組織の農村経済研究所で所長を務めていた錦織英夫の回顧録には，「われわれ（三村注・農村経済研究所所員）は共に華北については殆どその知見に乏しく，茫洋の歎を禁じえませんでした。（中略）此の際は，それら（三村注・従来の華北農業に関する調査・研究）にとらわれることなく，すべて先入観を棄てて，白紙に還った，現地に溶け込み，じっくり腰を据えて華北農業のイロハを学びとろう」[18]としたとある。

これらから，秋元や錦織という華北の農業研究・教育組織の上層部の対中国農業への認識には類似性があったといえよう。すなわち，日本側が中国側を一方的に指導する，或いは，日本側の農業技術の優位性を誇示して中国側の農業を一段低くみるのではなく，中国農業の実態にきちんと目を向け，それに即して研究指導を実施しようとする姿勢である[19]。

次に，華北産業科学研究所の研究・教育指導を担当した技師らが残した当時の報告書に着目し，その記述からかれらの対中国農業への認識，評価を検討する。注目したのは，華北農事試験場・農業技術訓練部が出した『満州見学記』である。

> 「是より第一回見学旅行の報告会を開催致します。（中略）旅行中特に，練習生の収穫の主なるものを拾って見る事と致します。
> （中略）
> 二，満州には，三十年前より（中略）何等の野心もなく農民の為努力し続けて来た，而して其結果は今日の満州国農業開発に甚大な貢献をなしていること，合わせて，日本が長い間，忍耐強く満州に対し誠意ある指導と講演をなして来た事を，事実上明瞭に旅行者とし

て見る事が出来たこと。

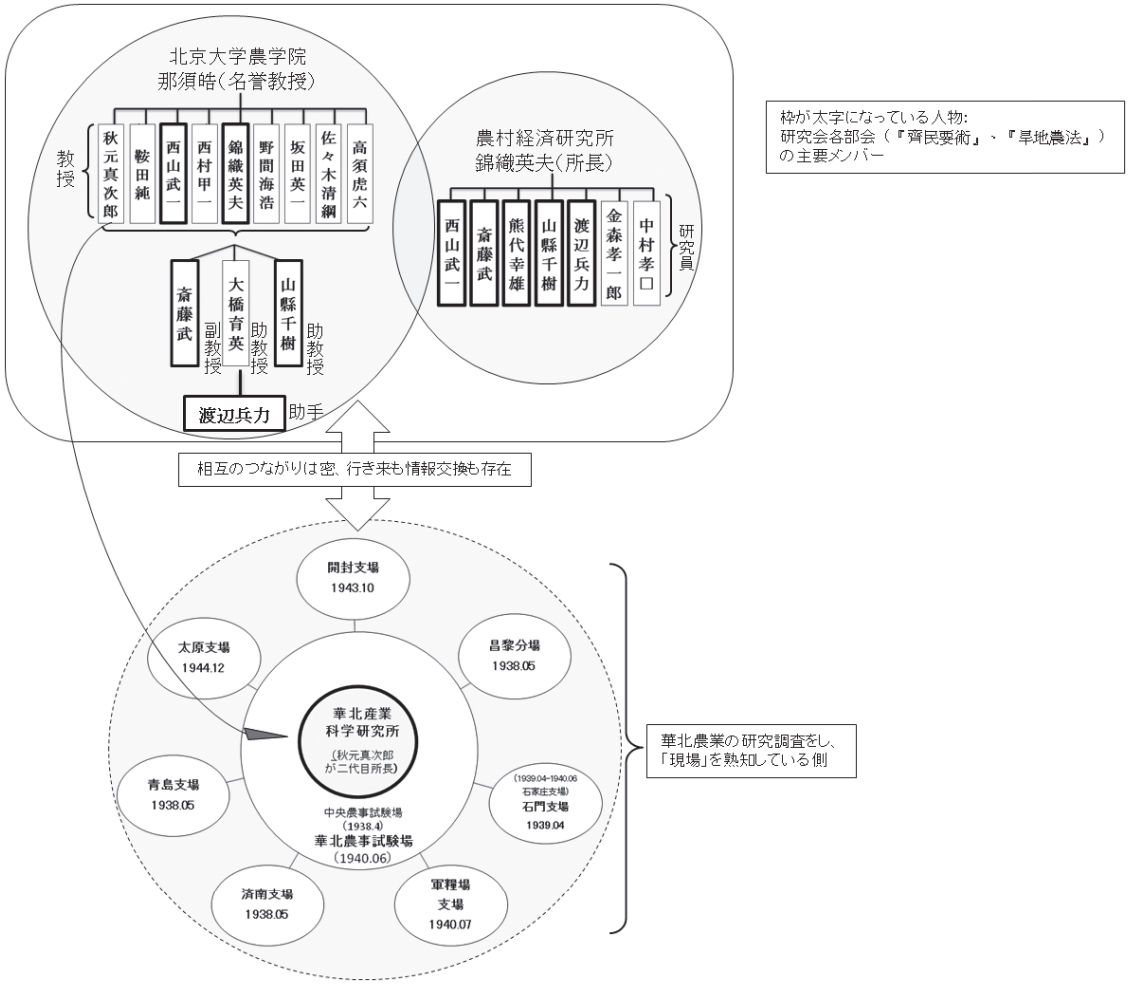
三，満州に於ては，日本を中心として，相協力全く羨ましい迄に手を握り合って，各種の建設に従事し，其成績は実に目覚しいものがあり，此点華北の範とすべきであること。

四，満州国の各種農産物増産計画は，強力且計画的に進行中であって，此部面に於ても日本人を中心指導者として，日満協力実績をあげていること。

五，日本人開拓農民の入満に従い，（中略）技術と科学を基礎とせる日本人の指導する新農業の実行により，単一面積よりの増収が好成績裡に実験せられつつある如き，現在の華北営農改善に本人の指導する新農業の実行により，（中略）現在の華北営農改善に資すること多大なるを知れること」[20]

上記報告書では日本の「満州」[21]への関与が野心に満ちたものではなく，日本側の農業指導によって成果が上がったことが強調されている。ま

図１　北京大学農学院（附設農村経済研究所）と華北産業科学研究所の人的ネットワーク



出所：筆者が第Ⅱ章の内容を整理し，図に起こしたもの（なお，北京大学農学院の人員は1939年時，農村経済研究所の人員は1944年時のもの）。

た,「日本の農業技術・その指導力が中国より上」であることは自明とされ，中国への日本の農業技術・指導の必要性を疑う姿勢は皆無である[22]。加えて，ここで重要なのは，当時，華北産業科学研究所の訓練生が満州への見学を行っていた事実である。なお，華北産業科学研究所の技師らが満州の農業調査・研究を目的に出張していたことを示す記録も存在する[23]。これらにより，訓練生だけでなく，技師らにも華北に留まらずその他の地域の農業事情視察・情報交換の機会が存在したことが確認できる。

なお，他の報告書には「中国学生は，一般に忍耐力の欠如と,他に依存する傾向の余りに強い事,そうして徹底した個人主義者である事は，前回の旅行に於て苦い程」経験したという記述や,「他人のを手伝うとか，又先生のものを率先して持ってやろうと云う観念は，一つもないからです。こうしなさい，ああしなさいと云う事に対しては，よくやりますが，お互いに助け合うと云う事は全然だめ」など，中国人訓練生の人となり・態度に対して厳しい評価もみられた[24]。

以上を整理すると，華北産業科学研究所，北京大学農学院，そこに附設された農村経済研究所で研究・教育にあたっていた日本人の中には，対中国農業への様々な認識・評価が見られたことが分かる。同時に,在華北の農業研究・教育組織を担った上層部の中に，秋元や錦織といった中国農業の実態にきちんと目を向け，実態に即した研究指導を行おうとした人材がいたことは重要である。それは，かれら自身の中国経験とその見識が，後に日本へ移植される流れを生み出したからである。

Ⅲ．華北の「乾地農法」と日本人農業研究者らの接触，その評価

Ⅱ章で検討した華北の農業研究・教育組織の上層部にあった研究者らがどのような方法で当時の華北の農業実態を把握し，その認識を深めていったのかを本章では考察する。

1．華北農業に対する日本人農業研究者らの評価

> 「北支（三村注・華北）の農業は，正に自然の鏡といえるほど，独得の風土的特性を持っている。まず第一に，北支の農業は畑地農業であり，乾地農業（dry farming）であること」[25]

これは先に紹介した錦織の華北農業に対する回想であるが，華北農業の特徴とは,「畑地農業」が主である事に加え,「乾地農業（dry farming)」でもあるという点にこそあった。

なお，田島（2006）は錦織と同じ北京勤務だった熊代幸雄，後に北京へ異動してきた山田登（東大農学科卒）らの議論から，華北農業の歴史的な特徴を以下 3 点に整理している。その 1 点目は,「中耕・除草を中心に手労働作業を残存させた労働集約的な農法である点」，次は,「休閑を含む穀物中心の高度な作付体系のもとに耕地面積当たり収量の極大化が図られている点」，最後は,「飼料作物および大家畜による畜産，酪農が未展開な点で，欧米のドライファーミングとはかなり異質という点」である[26]。ただ，その特徴を形成した根底には，年間降水量が極めて少ないために「降水量をできるだけ耕地に受け入れ，保持し，これを作物に吸収，利用させる」原理が存在し,「永年の経験によって，この目的にかなったやり方」が確立された点を強調しておきたい[27]。

華北農業と日本農業との違いを目にした，在華北の日本人農業研究者らは驚きを示すと同時に，華北農業への評価を高めていった。その評価を示す箇所を紹介する。まず，錦織のそれである。

> 「次に，北支農業は，大陸農業であるため，自然変動が極めて大きいが,それに照応して,

農業に極めて自在な変通性が備わっている点である。（中略）年の初めに，あらゆる場合をあらかじめ考えて，計画的に万端の準備を整えている点は注目されるべきである。（中略）

かかる特性は，わが国農業では，その要否は別として，あまり見られないものである。（中略）そこ（三村注・気象条件の変化，土地条件の変化などに即応し，作物を選択，作期・耕作法を変えるなど，自在に対応できる農家の知恵）には，農業の危険分散体制の生まれる基礎があると考えられる」[28]

さらに，錦織は別の箇所では以下のように述べる。

「華北農業はかかる乾地農法と湿潤地農業とを年々の気象変動に応じて使い分けており（中略），両種の異なる農法の総合化されたものである。そこに華北農業の複雑性と精緻さとが見られ，大自然の脅威の下で，限られた耕地を最高に利用せんとする並々ならぬ努力の跡がうかがわれる。

（中略）

しかし，わが内地では，未だこの点に関する一般の関心が少ないのは誠に遺憾である。これに反して華北では，すでに経験的にその原理を体得し，これを経営に巧みに総合化している。この点まことに驚嘆に値する。（中略）要するに，白土農業と黒土農業[29]とは華北の異なる土壌の上に，それぞれ総合的に組み立てられたものであるが，農民はこれを巧みに経営にとり入れ，これを総合化し，条件変動に即応しうる態勢をとっている。そこに大きな意義がある」[30]

上記内容から錦織が華北農業に対して高い評価をしていたと同時に，日本側の農業における課題を自覚していった様が読み取れる。同じく北京勤務だった山田の著作に目を転じると，「（三村注・華北では）極端に限られた土地と資本とを以て烈しい自然と真正面に向き合ったまま，多年に亘る苦しい幾多の経験から編み出された巧妙な手段をもって旱燥に対抗しつつあると見ることができる」，または，「（三村注・豊富な灌漑水の組織的確保が望めない華北では）およそ利用し得る地下水，地上水のすべてが灌漑され，これが「旱地農業」の重要な構成分子として包含せられている」[31]という内容がみられ，ここにも華北農業に対する評価が看取できる。

では，こうした華北農業への特徴，実態に対し，在華北の日本農業研究者らはいかに理解を深めていったのだろうか。

2. 古農書部会，乾地農法部会などの研究会活動の実態

その大きな役割を果たした一つが，北京農学院の附設組織，農村経済研究所内で開始された研究会であった。研究会は農村経済研究所にて錦織英夫所長を始めとして，西山武一，熊代幸雄，斎藤武，渡辺兵力らが中心となり，中国古農書や乾地農法の部会が設けられ，それぞれの部会で研究会が実施されたという[32]。研究会メンバーが華北の農村調査に出かけることも頻繁にあったようで，調査時に華北農民が行なっている乾燥地農業の技術について見識を深め，かつ，華北農業を評価するようになったという[33]。なお，部会での議論の際には，研究所の所員たちがよく集まって会合を重ね，研究所の在り方や今後の調査研究の進め方などについて論議し，また華北農業や日本農業の今後などについて語り合ったという記述も見られる[34]。

さらに，研究会に参加していた西山武一によれば，1941年に農村経済研究所で中国古農書の一つ

『斉民要術』の輪読会が始まったのだという。輪読会では『斉民要術』と並行して，ウィドソー（Widtsoe）の『ドライファーミング』，許維遹『呂氏春秋集釈』なども読んでおり，作物学研究室の山田登や中国史学で北京に留学中の「原田文学士」がチューターを務めている[35]。さらに，研究会に参加したメンバーらは，『斉民要術』の読解，並びに，研究を通して，必然的に華北畑作農法と華中南および日本の稲作農法との違和感・親和性の問題に目を向けるようになったと西山は回顧している[36]。

以上のように，農村経済研究所を軸とした研究会での学びと議論，それと同時に，研究者らが華北農業の実地調査を重ね合わせることで，在華北（北京を中心とした）の日本農業研究者らは華北農業の特徴，実態に対する理解を進めていった。その意味で，農村経済研究所における各部会での研究会は，極めて大きな意義を持っていたと考えられる。

Ⅳ．新構想の総合研究の場，農事試験場三本木原営農支場の設立へ

本章では日本人農業研究者らが華北農業から吸収した知見を反映させ，新たな総合的試験研究の場（三本木原営農支場）が構想されていく経緯，そこに関連する人的ネットワークと当時の社会的背景，さらに，その設立意義について考察する。

1．日本人研究者らの華北農業からの吸収，新たな着想

やや結論を先取りして言えば，三本木原営農支場の設立構想に強く関与した人物は，後に支場長となる錦織英夫と，錦織とほぼ同時期に北京大学農学院教授を務め，かつ，華北産業科学研究所所長を兼任した秋元真次郎である。よって，以下，錦織と秋元が華北農業から影響を受け，新たな農事試験研究の構想を持つようになっていった経緯を整理したい。まず，錦織の回顧録から見ていこう。

> 「わたくしが北京大学農村経済研究所在勤時代に，よく同志と共に北支の畑作農業について語り合い，ふりかえって内地農業の今後を思い，内地でも畑作農業の再建（農の総合性）が緊要だとし，南九州の都城付近を拠点とした畑作試験場兼研修所の建設を考えたことがあった」[37]

農村経済研究所時代，華北農業の研究を進める過程で，錦織が日本の畑作農事試験場の構想を持ちはじめた事実がここで確認できる。なお，農村経済研究所での研究会が構想の原点となった点は既述したが，ここでもその裏付けとなる内容が確認できる。

別の報告書で錦織は，従来の農事試験場の問題点を述べると共に，同支場での研究体制の特徴について，次のように述べる。

> 「本来農事試験場と云えば，米，麦始め各種作物の技術的試験研究を行う機関であって，（中略）総合的試験研究を行うものではなかった。（中略）即ち当時一般にわが国では，農業の重要性及び食糧の増産確保の緊急性が今までにない真剣味を以って再認識され，（中略）反省が促されたときであった。
>
> （中略）
>
> 即ち農業に対する従来の試験研究並びに指導上の欠陥，又それ故に日本農業の行き詰まりが強く反省され，その結果，自然科学並びに社会科学の研究成果を結集し，これが総合的実験研究を行い，以って科学的総合農業の確立を期せんとするにあった」[38]

ここから読み取れるのは，華北農業に接する過

程で，錦織らが日本の従来の農事試験研究が「余りにも部分的且つ一面的」であることに「強い疑問」を感じ始めた経緯である。他には，同支場で錦織の部下だった鈴木福松の回顧談には以下の記述がみられる。

> 「とくに，秋元氏は華北産業科学研究所での体験に基づき，いろんな新しい試験場の設立構想を，北京大学農学院時代からの知合いであった錦織支場長に経営試験を含め種々助言されたと回想録にも書いてありますし，私自身も聞いております。
>
> それに営農支場の研究姿勢の根底にあった総合的考え方は，錦織さんの北京時代の体験，とくに華北畑作農業についての考察からも由来しているように思います。いままで長い間日本国内で慣れ親しんできた水田作農業とは全く別な多角的な畑地農業，乾地農業（dry farming）がそこにある，しかも総合的風土性に根付いている。その驚きであったと思います。華北畑作農業の話は繰り返し聞かされました」[39]

ここには華北産業科学研究所所長の秋元が錦織に対して同支場の設立構想の助言をしていたこと，また，その構想の根底には秋元と錦織の華北農業から得た経験・知見が大いに反映されていたとの証言が確認できる[40]。

以上から，華北農業の実態を秋元と錦織が自ら体験し，そこで得た知見によって新たな農事試験の研究体制への着想が生まれ，後に同支場が設立されることになった際の，その下地が形成された経緯が明らかとなった。

2. 新たな農事試験場構想を支えた人的ネットワーク

その一方で，秋元や錦織の構想が実現に至るまでには，それ以外にも多くの人間が介在したはずである。また，その他にも新構想を推し進めた当時の社会的背景も関与しているはずであり，それら実態にも目を向けるべきと考える。

そこでまず，この構想実現に関わった人的ネットワークを整理したい。三本木原に営農支場が設立された1944年，日本国内の農政は以下のような状況であった。

> 「その間（1941－1945年・三村注），農林省農政課長（東畑四郎）を中心とする中堅陣は，農事試験場の中堅技術者とともに，支場設置による農事試験場の拡充，強化によって当面の食糧生産確保の対応をするとともに，長期的見地に立って農事試験場（鴻巣試験地を含む）の基礎研究部門の強化をはかり，将来に備える計画をたて，これを着々と実行に移した。（中略）農事試験場における基礎研究の強化は，1944年農業気象部および生理部が西ヶ原に設置されたことに始まった。（中略）同じ時期に種芸部において作業能率の研究を開始したのは，戦時下労力不足のもとで，耕地面積当り生産量の増加とともに，労力当り生産量の増加を同時に要求されることに発した。翌1945年６月，青森県下六戸村に，三本木原営農支場を創設，開発の見込まれる寒冷地，高原地における合理的営農法の確立を図るものであった」[41]

確かに，1941年から45年の社会状況を考慮すれば，「農事試験場の拡充，強化」によって「食糧生産確保」が要請された点は合点がいく。また同時期，「長期的見地」から「基礎研究部門の強化」と，「将来に備える計画」を立てていたこと，さらに，そうした農業政策の延長線上に同支場の設置の意図があった事実は特質に値するだろう。

この農政方針を立てたのが，農林省農政課長の

東畑四郎[42]を中心とした中堅の農政官僚であった。なお，東畑は興亜院華北連絡部に勤務した経験があり，中国経験者である。また，同時期，興亜院華北連絡部で東畑の上司であり，華北の農業技術を主とした農業政策を進めていたのが湯河元威[43]であった。さらに，二人が興亜院勤務時代，農林官僚の中でも中心的人物であった石黒忠篤[44]が北京を訪れ，二人との交わりを持っていたことも確認できる[45]。なお，石黒について東畑は以下のように記している。

> 「亡くなった石黒忠篤が当時，農務局長をしていた。この人はいわば学界，官界のボスで，絶えず農業問題の解決を自ら立案していた。（中略）ある意味で，この人が農林官僚の性格をつくったような人であると思う」[46]

当時の農林官僚の中で石黒が「ボス」として位置し，その下に湯河，さらに東畑が続いていた。なお，同支場の設置を推進した人材は他にもいた。それが1944年10月，三本木の現地視察を行ったメンバーである。具体的には，農政課長東畑四郎を始め，経営課長平川守，会計課長安孫子藤吉，考査課長塩見友之助，農産課長秋元真次郎，特産課長坂田英一，耕地課長溝口三郎，畜産課長三宅三郎の 8 課長のほか，農事試験場技師和田栄太郎，畜産局技師神尾正夫であった[47]。視察メンバーのうち，東畑・秋元・坂田は在華北勤務の経験者である。ちなみに，この視察は，石黒忠篤が冷害に悩む東北農民からの陳情に応えるという経緯で動き出したものであった[48]。

この視察メンバーの一人で，かつ，北京時代に親交の深かった秋元が，錦織に対して直接，農事試験場の支場として畑作経営試験場を青森の三本木原に新設するに至った経緯を伝えた上で，『かねてから君（錦織）の主張通りの畑作研究の場なのだから』と支場長を依頼し，錦織がこれを受けている[49]。

以上を整理すると，①当時の中堅農林官僚が打ち出した農政方針（長期的見地に立った基礎研究部門の強化とその計画），②社会情勢（食糧確保），③農林官僚トップであった石黒に対する東北地方からの陳情，これらが三本木原営農支場設立の原動力となっていた。ここで特に強調すべき点は，北京時代に華北農業を経験し，その知見を深めた結果，新たな農業研究体制のあり方を求め始めていた秋元や錦織らの新構想が，同支場の設立・計画段階において，その基盤的役割を果たした点である[50]。

3. 三本木原営農支場の設立，その意義

1945年 6 月27日，青森県に三本木原営農支場（支場長は錦織英夫）が創設された。これが国立農事試験場の一支場として新設されたことは，画期的であった。本来，農事試験場といえば，米・麦をはじめ各種作物の技術的試験を行う機関とされており，同支場のように農・畜・林全般にわたる営農に関する総合的試験を実施すること自体が稀であったからである。ちなみに，現在では日本における農業経営研究の開始が，同支場に端を発するという認識が一般的[51]なものである。農業研究の新たな体制の道を開いたと言えよう。

同支場では，農業生産ならびに経営に関する各種科学的研究結果を総合的に適用した実験研究を行い，対象地域（開発の余地を多く残す寒冷地，高原地）における合理的営農法の確立と指導者の養成が目指された[52]。当初，支場長の錦織を先頭に職員数は33人，用地の総面積は約280ヘクタール，敷地内には畑地のほかに水田・ため池・放牧採草地・防風林・山林原野を有していた。総合農業確立の趣旨に基き，従来の建設業務的組織を改め，企画研究室・庶務部・調査研究部・技術研究部・経営試験部・修練部の一室五部制とし，本格的な試験研究を開始している[53]。

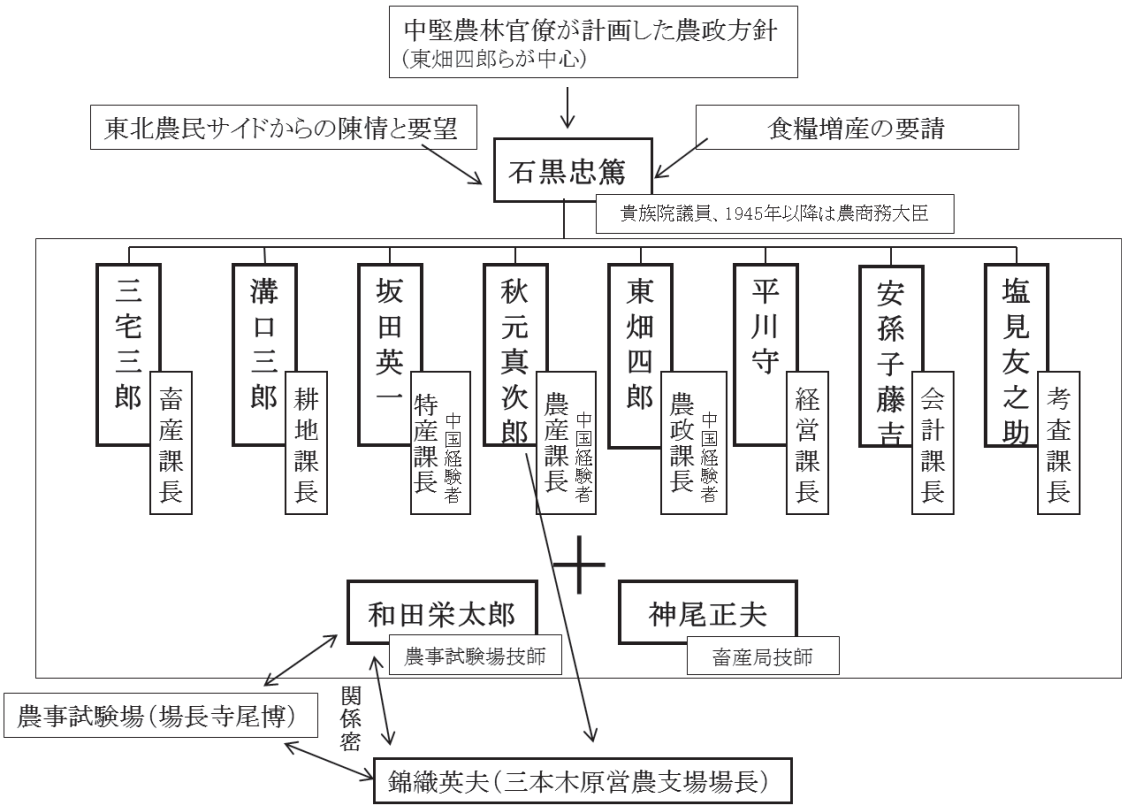
なお，当時，同支場の鈴木福松の回顧によれば，研究体制の特徴は三つあった。一つは，「野外調査と実験研究と組立て試験，つまり調査研究部と技術研究部と経営試験部，この三者のフィードバック・システムが組織的にできあがっていたこと」，二つめは「経営資源の内部循環・均衡型」[54]，最後は「経営の制約要素の探索に主眼点をおいていたこと」[55]であったという。要するに，現場に直結して調査を行なうことは，単に対象農家の改善だけが目標でなく，国レベルでの技術や経営（企業）に関する政策に資するという確信の下，同支場では研究が進められていたのである[56]。

しかし，その研究体制も連合国軍最高司令部（GHQ）の指示により４年間で終了を余儀なくされる[57]。その間，主な成果としては，寒冷地畑作地帯の経営調査，労働合理化，畑作物作期の可動範囲と作付体系・輪作，農法実態と雑草消長，家畜の経営経済的性格，風害と土壌侵蝕，家畜（養豚）経営と飼料標準の策定などが挙げられ，多岐にわたる[58]。

Ⅴ．おわりに

本稿では1930年後半，日本人農業研究者らが中国華北の農業を直接目にした経験から，それに対する驚きと評価を高めた実態，さらに，日本人研究者らが得た華北農業に対する知見が，1945年６月という終戦間際の時期に三本木原営農支場の創設に至った実態を，当時，その構想実現に関係した人的ネットワーク，さらに当時の日本側の農政事情にも言及することで，その全体像を明らかに

図２　三本木原営農支場，その構想を支えた人的ネットワーク



出所：筆者が第Ⅳ章の内容を整理し，図に起こしたもの。なお，図の中央にある枠内の10人は，三本木現地視察のメンバー。

することが出来た。これにより，日本人の中国体験が第二次大戦後の日本に何をもたらしたのか，この問題意識に応える一つの成果を挙げられたものと考える。

最後に本稿の課題を述べたい。1945年6月の三本木原営農支場の設立以後，中国からの影響（営農に関する「総合的な試験研究」の在り方）は日本農業の中でいかに拡大したのか（同時に，いかなる点で影響が及ばなかったのか），その史的考察を行うことである。すなわち，戦後の日本社会における「総合的な試験研究」の史的展開を，田島（2007）などの問題提起を参考にしつつ，新たな史料を活用しながら，さらに考察を進める必要がある。今後，明らかにしていきたい。

［注］

⑴ちなみに，これと類似した客観的な認識・評価は先に挙げた張（2004）の研究成果の中にも確認される。

⑵田島俊雄「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」『「帝国」日本の学知』第6巻，岩波書店，2006年，70頁。

⑶前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」72－73頁。

⑷先行研究の一つ，前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」は既にこの点をまとめている（73, 74頁）。だが一方で，その整理において用いた史資料が，論文中にて全て明示されているわけではない。そこで本稿では，①横山宏『遊華老残記：国立北京大学農学院への回想』（1991年，15－16頁）や，②JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015944700，5．北京大学ニ関スル事務興亜院引継ノ件，北京大学関係雑件 第二巻（H.6.2）（外務省外交史料館）や，③JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02031708500，28 国立北京大学農学院日籍教職員調査表，支那中央政況関係雑纂／官吏任免関係／日系官吏職員調査表 第一巻（A.6.1）（外務省外交史料館），などにあたり，再度確認を行った。

⑸JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02031708600，29 国立北京大学附設農村経済研究所日籍職員調査表，支那中央政況関係雑纂／官吏任免関係／日系官吏職員調査表 第一巻（A.6.1）（外務省外交史料館）。なお，「中村孝□」となっているのは資料中の文字が解読不能であったため。

⑹前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」80頁。

⑺山本潔「華北産業科学研究所」『華北産業科学研究所業績集（産研会報）』第1号，1985年9月。

⑻山本晴彦『帝国日本の農業試験研究 華北産業科学研究所・華北農事試験場の展開と終焉』農林統計出版，2015年，139－141頁。他にも，秋元真次郎「回想　華北産業科学研究所回顧」『産研会報』第7号，1992年5月を参照した。

⑼こうした管轄する部署の変遷と，戦局の悪化などが相まって，華北産業科学研究所の運営方針が変化しく様を，2代目所長であった秋元真次郎の回顧録からも読み取ることができる（秋元「華北産業科学研究所回顧（続）」『農業』1042号，1971年を参照）。

⑽農林省農政局『華北産業科学研究所の業績回顧』1949年，3頁。

⑾前掲秋元「回想　華北産業科学研究所回顧」50，51頁。なお，秋元の回顧によれば，秋元が所長に就任後，この予算配分に決定したとある。

⑿秋元真次郎（1893－1980）：東京帝国大学農学部卒業後，農林省に入省。農林省から出向し，華北産業研究所長，華北農事試験場長，北京大学農学院教授を兼任した。帰国後，農産課長をつとめた。亜細亜農業技術交流協会の設立にかかわり，法人成立時の理事である。後，大日本

農会会長。

⒀前掲山本『帝国日本の農業試験研究』278頁。

⒁農業技術訓練部の実態に関しては，以下，2代目所長の秋元真次郎の回顧録が参考になる。「日本の府県には農業技術員講習所があって，それが指導の第一線に立つ人を養成する。これが北支ではまったく緊急であったわけです。そのため，養成施設を持っていました。北京本場は毎年150名をとって2ヵ年養成する。本場ではさらに家畜防疫の専門技術者を20名養成した。それから済南と青島には約50名ずつをとってこれも2ヵ年養成して，こちらの養成した数は2～3000人になったと思います。出るとすぐに省で指導にあてたんですが，入る人も省が推薦した学生で，日本でいえば中学校，農学校卒業程度以上の学力がありました。日本語も話せるし技術もあるので非常に歓迎されました。これは農事試験場の仕事としてやりましたが，北支農業発展上相当役に立ったと思います」（前掲秋元「華北産業科学研究所回顧（続）」49頁）

また，青島檔案館にも，華北産業科学研究所が農業技術員訓練生の募集を行っていたこと，並びに，その実態を示す檔案が複数所蔵されている。

①「華北農事試験場続招農業技術練習生簡章」1941年5月，A20－1－336－86，青島市檔案館，②「仰派員前往華北農事試験場青島支場監試招考農業技術練習生由」1941年6月，34－2－63－31，青島市檔案館，③「華北農事試験場本年度招考農業技術練習生」1943年6月，B34－2－63－13，青島市檔案館。

⒂この整理にあたっては以下の資料を用いた。①JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015996300，3民国三十二年七月 民国三十三年度事業計画概要，研究所助成関係雑件／華北産業科学研究所関係／経費関係 第八巻（H.6.2）（外務省外交史料館），②華北農事試験場『民国三十二年度 華北農事試験場要覧』1943年9月，③産研会『華北産業科学研究所業績集』第1号，1985年。

⒃前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」76頁。

⒄前掲秋元「華北産業科学研究所回顧（続）」47頁。なお，資料中の下線部分は筆者によるものである。

⒅先行研究の一つ，前掲田島「農業農村調査の系譜」は既にこの点を指摘している（80頁）。本稿で引用する際には，その出典元を改めて確認した後，記載した（『永日抄』刊行会編『『永日抄』――西山武一自伝――』楽游書房，1987年，184頁）。

⒆本稿で挙げた資料は共に秋元と錦織の回顧録である。ゆえに，当時の両者の対中国農業への認識・研究態度がそのまま反映されたものであるかは十分吟味が必要，との意見も出されるであろう。そのため，本稿Ⅲ章にて，両者がこうした対中国農業認識を持っていたがゆえに開始された中国古農書や乾地農法の研究部会の立ち上げ，中国農業の実態に迫る取組が行われた経緯を論じることで，その裏付けとしたい。

⒇中川尋雄『満州見学記』華北農事試験場・農業技術訓練部，1942年，1－3頁。なお，資料中の下線部分は筆者によるものである。

㉑「満州」は歴史用語であるが，本稿では以下，煩雑さを避けるために括弧を省略する。

㉒こうした報告書の性格は，当時，興亜院（のち，大東亜省）の管轄下にあった華北農事試験場・農業技術訓練部が発行した報告書であることを考慮すれば合点がいくであろう。

㉓「出差赴任報告書（人事科保管）社会局調査費」1941年11月，A20－1－355－336，青島市檔案館。ちなみに，それぞれの出差（出張）の目的は「農業調査及視察」や「林業調査及視察」などと記載されている。また，「農業調査及視察」の出

張地域は「大連」「営口」「北京」「石門」「天津」「済南」などであり，華北地域が中心であったことをうかがわせる。その一方，「林業調査及視察」の出張地域は「大連」「天津」「瀋陽」「奉天」「新京」「哈爾浜」などとなっており，中国東北部の地域が目立つ。

⑵中川尋雄『皇記二千六百年　日本見学記』華北農事試験場・農業技術訓練部，1941年，3 頁と15－17頁。

⑸錦織英夫『農のこころ』日本イリゲーションクラブ，1984年，174頁。

⑹前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」87頁。

⑺前掲錦織『農のこころ』174頁。

⑻前掲錦織『農のこころ』176－178頁。なお，資料中の下線部分は筆者によるもの。

⑼白土農業と黒土農業とは華北の農業の風土性を端的に表現したものである。当時，華北では耕地を白土と黒土に区別していたが，白土とは雨降り直後でも耕起が可能で，風が吹くと土砂が飛散するような土であり，そこで行われる農法は乾地農法，もしくは暖地農法に比するものだという。一方，黒土とは雨降り直後は耕起が出来ず，そこで行われる農法は湿潤農法，もしくは寒地農法に比するものであった。

⑽前掲錦織『農のこころ』181－185頁。なお，資料中の下線部分は筆者によるもの。

⑾山田登『旱地農業概論』1949年，竹内書房，「まえがき」部分。

⑿なお，本稿の先行研究の一つである前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」の中でも，農村経済研究所にて研究会（輪読会）があったとの指摘が見られる。しかし，研究所内に部会が複数存在したことや，乾地農法の部会活動がその軸の一つであったことには触れられていない。

⒀以上の整理は，前掲横山『遊華老残記』46－47頁や，前掲書『『永日抄』――西山武一自伝――』175頁を参照した。

⒁前掲書『『永日抄』――西山武一自伝――』183頁。

⒂前掲田島「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」は既にこの史実を指摘（82頁）している。ただ，本稿で引用する際には，その出典元を改めて確認してから記載している（西山武一『アジア的農法と農業社会』東京大学出版会，1969年，449頁）。

⒃西山武一『アジア的農法と農業社会』東京大学出版会，1969年，450頁。

⒄錦織英夫「秋元さんを偲ぶ」『農業』1980年 7 月号，1980年。この他，錦織英夫「（Ⅰ）三本木原営農支場の沿革と概況」『東北農業試験場研究報告』2 号，1952年にも重複する内容が確認できる。

⒅前掲書『東北農業試験場研究報告』1 頁。

⒆西尾敏彦編『昭和農業技術史への証言　第 5 集』農村漁村文化協会，2006年，82－83頁。

⒇秋元の華北経験が新しい農事試験場構想に関与していたことは，錦織自身も言及している。実際，「秋元さんの営農支場の新しい構想は，正に華北産業研究所（総合試験場）における経験に基づくところが極めて大きかったように思われる」と書いており，先の資料を補強するものと考える。前掲錦織『農のこころ』405頁。

(41)農業技術研究所80年史編さん委員会編『農業技術研究所八十年史』農林省農業技術研究所，1974年，29頁。

(42)東畑四郎（1907－1980）：日本の農林官僚である。北京で興亜院華北連絡部に所属したことがあり，湯河元威とともに中国華北における食糧政策に携わる。戦後，農林事務次官を務める。

(43)湯河元威（1897－1958）：農商務省に入省。北京の興亜院華北連絡部に赴任中は，中国華北の農業技術を中心とした日本的農業政策を進め

た。その後，農林省米穀局長，食糧管理局長官を歴任。さらに，農商次官となり，食糧行政を担当した。農林中央金庫理事長。

⑷石黒忠篤（1884－1960）：東大法科卒業後，農商務省に入省。1931年農林次官，1940年第２次近衛文麿内閣の農林大臣。貴族院議員を経て，1945年農商務大臣をつとめる。公職追放後，参議院議員。1920年代，農本主義に支えられた石黒農政といわれる農業改革路線をしき，1930年代農業報国連盟理事長，満州移住協会理事長など戦時下の農政の中心となった。戦後，農地改革を推進した農林官僚の中でも中心的人物。

⑸東畑四郎記念事業追悼録編集委員会編『東畑四郎・人と業績』1981年，369－374頁。

⑹前掲書『東畑四郎・人と業績』396－397頁。

⑺前掲錦織「秋元さんを偲ぶ」16頁。

⑻青森県の農業関係者から三本木原の大規模な開墾事業促進に関して陳情が出されていたことを示す資料が複数確認できる。なお，これらは1935年前後，相次いで政府に提出されている。

①JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112278500，青森県三本木原大規模開墾ノ実現要望ニ関スル陳情書（三本木原大規模開墾期成会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（一）・昭和十年（国立公文書館）

②JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112278600，（附一）三本木原開墾沿革大要，内閣東北局関係文書・陳情書綴（一）・昭和十年（国立公文書館）

③JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112324300，開墾耕地　三本木原開墾事業実施促進ニ関スル件（青森県上北郡三本木町三本木原大規模開墾期成会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（総括，雪害，治水，開墾）・昭和十一年（国立公文書館）

④JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112324900，開墾耕地　農林省ノ計画ナル三本木原大規模開墾実施ノ件（青森県上北郡町村長会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（総括，雪害，治水，開墾）・昭和十一年（国立公文書館）。

その後，1941年12月に石黒忠篤は内閣東北局委員に任命されている。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A10111309800，石黒忠篤ノ内閣東北局委員任命ノ件，内閣東北局関係文書・人事関係書類綴（五）・昭和十六年一月（国立公文書館））。石黒は委員就任後，冷害に悩む東北農民への「善処」に本格的に取組み始めた動きが推察される。

⑼前掲錦織「秋元さんを偲ぶ」16頁。

⑽『東北農業試験場研究報告』には「これ（注・三本木原営農支場設定計画概要）が企画に就ては，当時農政局農産課長であった秋元真次郎氏，農事試験場技師和田栄太郎氏及び農政局小泉幸一氏（現農業総合研究所総務部長）等が主として之に当たられた」との記述が見られ，秋元が支場計画に大きく関与していたことが窺える（前掲書『東北農業試験場研究報告』，６頁）。

⑾前掲西尾『昭和農業技術史への証言　第５集』93頁。

⑿前掲書『農業技術研究所八十年史』46頁。

⒀前掲書『農業技術研究所八十年史』46頁。

⒁具体的には，畜力・飼料・厩肥の三者が経営内部で自給的に完結する経営タイプ，均衡するタイプをいかにして形成するかを目標とした経営のあり方を指す。

⒂具体的には，試験場の改良技術を新に農家に導入する際，現行技術を聴き取りながら，技術者から代替すべきだとする改良技術を導入していない理由をきいていく。その理由を聞き出すと，そこに経営内部で克服できる要因と解決できない外部要因が仕分けされ，その結果，その時の農林業政策や行政施策との関連性を把握できるというもの。

⑸⑹前掲西尾『昭和農業技術史への証言　第５集』61－72頁。

⑸⑺GHQは従来の農事試験場，園芸試験場，畜産試験場などといった専門別主体の研究体制を改組し，中央に農業技術研究所，地方に北海道・東北など７地域農業試験場（翌年，中国四国農試が中国と四国農試に分裂して８地域農試）を配置する地域農業重視の研究体制に改組している。そのため，同支場は東北農業試験場に吸収され，錦織は新設の東北農業試験場の場長を拝命，同時に配置換えとなった多くの職員とともに盛岡に移動することになったのである。

⑸⑻西尾敏彦「錦織英夫が追い求めた農業の総合性，総合研究」『農林水産技術同友会報』58号，2014年。

［参考文献］

（日本語）

【未刊行資料】

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112278500，青森県三本木原大規模開墾ノ実現要望ニ関スル陳情書（三本木原大規模開墾期成会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（一）・昭和十年（国立公文書館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A10111309800，石黒忠篤ノ内閣東北局委員任命ノ件，内閣東北局関係文書・人事関係書類綴（五）・昭和十六年一月（国立公文書館））。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112324300，開墾耕地　三本木原開墾事業実施促進ニ関スル件（青森県上北郡三本木町三本木原大規模開墾期成会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（総括，雪害，治水，開墾）・昭和十一年（国立公文書館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112324900，開墾耕地　農林省ノ計画ナル三本木原大規模開墾実施ノ件（青森県上北郡町村長会），内閣東北局関係文書・陳情書綴（総括，雪害，治水，開墾）・昭和十一年（国立公文書館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02031708600，29 国立北京大学附設農村経済研究所日籍職員調査表，支那中央政況関係雑纂／官吏任免関係／日系官吏職員調査表 第一巻（A.6.1）（外務省外交史料館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02031708500，28 国立北京大学農学院日籍教職員調査表，支那中央政況関係雑纂／官吏任免関係／日系官吏職員調査表 第一巻（A.6.1）（外務省外交史料館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A11112278600，（附一）三本木原開墾沿革大要，内閣東北局関係文書・陳情書綴（一）・昭和十年（国立公文書館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015944700，5．北京大学ニ関スル事務興亜院引継ノ件，北京大学関係雑件 第二巻（H.6.2）（外務省外交史料館）。

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015996300，3 民国三十二年七月 民国三十三年度事業計画概要，研究所助成関係雑件／華北産業科学研究所関係／経費関係 第八巻（H.6.2）（外務省外交史料館）。

【刊行資料】

秋元真次郎（1971）「華北産業科学研究所回顧」『農業』6，7月号。

秋元真次郎（1992）「回想　華北産業科学研究所回顧」『産研会報』第７号。

稲塚権次郎（1992）「華北の食糧増産と品種改良」『産研会報』第７号。

上田康雄（1989）「済南支場で見たこと，聞いたこと」『産研会報』第４号。

『永日抄』刊行会編（1987）『『永日抄』――西山

武一自伝――』楽游書房。
華北農事試験場（1943）『民国三十二年度 華北農事試験場要覧』。
産研会（1985）『華北産業科学研究所業績集』第1号。
大日本農会（1980）「大日本農会会長・秋元真次郎氏を悼む」『農業』1980年4月号。
大日本農会（1981）「秋元・盛永両先生追悼座談会（1）」『農業』1981年4月号。
東畑四郎記念事業追悼録編集委員会編（1981）『東畑四郎・人と業績』。
田口教一（2001）「華北産研の業績回顧」『産研会報』第11号。
田島俊雄（2006）「農業農村調査の系譜――北京大学農村経済研究所と「齊民要術」研究」『「帝国」日本の学知』第6巻，岩波書店。
田島俊雄（2007）「華北の乾地農法と農業経済研究の系譜」『植民地文化研究』第6号。
寺田慎一（1987）「私の北京引揚げ記」『産研会報』第2号。
寺田慎一，陣野久好（1995）「58訪中日本稲作技術団の記録」『産研会報』第10号。
那須皓先生追想集編集委員会編（1985）『那須皓先生――遺文と追想』農村更生協会。
中川尋雄（1941）『皇記二千六百年　日本見学記』華北農事試験場・農業技術訓練部。
中川尋雄（1942）『満州見学記』華北農事試験場・農業技術訓練部。
中原良男（1985）「農業技術訓練部の想出」『産研会報』第1号。
西尾敏彦（1997）「歴史に学ぶ，総合化ということ」『農業技術』第52号。
西尾敏彦（2000）「総合研究の系譜」『21世紀農業技術の視点　大日本農会叢書2』。
西尾敏彦（2005）「錦織英夫『農のこころ』と三本木原営農支場」『農業』11月号。
西尾敏彦・昭和農業技術研究会編（2006a）『昭和農業技術史への証言』第5巻，農山漁村文化協会。
西尾敏彦（2006b）「農業技術を創った人たち」『「帝国」日本の学知』第7巻，岩波書店。
西尾敏彦（2014）「錦織英夫が追い求めた農業の総合性，総合研究」『農林水産技術同友会報』58号。
錦織英夫（1980）「秋元さんを偲ぶ」『農業』1980年7月号。
錦織英夫（1984）『農のこころ』日本イリゲーションクラブ。
西山武一（1969）『アジア的農法と農業社会』東京大学出版会。
農業技術研究所80年史編さん委員会編（1974）『農業技術研究所八十年史』農林省農業技術研究所。
農林省東北農業試験場（1952）『東北農業試験場研究報告』2号。
農林省農政局（1949）『華北産業科学研究所の業績回顧』。
朴敬玉（2008）「朝鮮人移民の中国東北地域への定住と水田耕作の展開――1910～20年代を中心に――」『現代中国』第82号。
藤原辰史（2007）「稲も亦大和民族なり――水稲品種の「共栄圏」」『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院。
藤原辰史（2012）『稲の大東亜共栄圏』吉川弘文館。
山田登（1949）『旱地農業概論』竹内書房。
山本晴彦（2013）『満州の農業試験研究史』農林統計出版。
山本晴彦（2015）『帝国日本の農業試験研究 華北産業科学研究所・華北農事試験場の展開と終焉』農林統計出版。
山本潔（1985）「華北産業科学研究所」『華北産業科学研究所業績集（産研会報）』第1号。
山本潔（1991）「華北産業科学研究所始末記」『農業』10月号。
山本秀夫（1965）『中国農業技術体系の展開』東

京大学出版会。
湯川真樹江（2011）「満洲における米作の展開一九一三－一九四五：満鉄農事試験場の業務とその変遷」『史学』第80巻第４号。
横山宏（1991）『遊華老残記：国立北京大学農学院への回想』非売品。
米田茂男（1991）「乾燥農業として見たる華北の農業」『産研会報』第６号。
李海訓（2013a）「「小站米」ブランドの形成と日本の華北占領」『中国研究月報』第67号。
李海訓（2013b）「近代東北アジアにおける寒冷地稲作と優良品種の普及：もう１つの「緑の革命」『社会経済史学』第79号。
李海訓（2014）『中国北方における稲作と日本の稲作技術』現代中国研究拠点研究シリーズNo.４，東京大学社会科学研究所。
李海訓（2015）『中国東北における稲作農業の展開過程』御茶の水書房。

（中国語）
【未刊行資料】
「出差赴任報告書（人事科保管）社会局調査費」1941年11月，A20－1－355－336，青島市檔案館。
「華北農事試験場本年度招考農業技術練習生」1943年６月，B34－2－63－13，青島市檔案館。
「華北農事試験場続招農業技術練習生簡章」1941年５月，A20－1－336－86，青島市檔案館。
「仰派員前往華北農事試験場青島支場監試招考農業技術練習生由」1941年６月，34－2－63－31，青島市檔案館。

【刊行資料】
丁暁傑（2012）「日儀時期華北産業科学研究所的設立及其活動」『史学月刊』第２期。
劉大可（2005）「抗日戦争時期日本在山東産業開発計画」『済南大学学報（社会科学版）』第４期。
趙方田，楊軍主編（2008）『中国農学会史』上海交通大学出版社。
張同楽（2008）「1940年代前期的華北蝗害与社会動員――以晋冀魯豫，晋察冀辺区与淪陥区。
張会芳（2004）「抗戦時期華北日系農場的植民経営」『抗日戦争研究』12月号。
朱世桂（2013）「中国農業科技体制百年変遷研究」博士学位論文（南京農業大学），11期。